貧困と恋愛
―恋人人数と性関係人数の不平等の計量分析―

小　林　　盾

[要約]

この論文は、家族形成まえに貧困を経験したり、現在貧困を経験している人は、そうでない人とくらべて恋愛経験に不平等があるのか、というリサーチクエスチョンを検討する。そのために、家族に関する振り返り調査をデータとして用い（2022 年にランダムサンプリングで実施、有効回収票数 3,327、回収率 43.7％）、15 歳時から初婚まで（未婚なら現在まで）の恋人人数と性関係人数を計量分析した（分析対象は 2,271 人）。その結果、男性では現在の貧困経験がどちらの恋愛経験もへらしたが、女性では家族形成まえの 15 歳時の貧困経験がどちらの恋愛経験もむしろふやした。したがって、恋愛経験には貧困経験による不平等がたしかにあった。ただし、貧困から恋愛への規定メカニズムは、単純ではない。経済的に豊かでも貧しくても、平等に豊かな恋愛をし、幸せな家族形成ができる――そのための条件の解明が、引きつづき期待されよう。

[キーワード]

貧困、恋愛、不平等、恋人人数、性関係人数、計量分析

1　リサーチクエスチョンと仮説

1.1　リサーチクエスチョン

経済的に貧しいと、恋愛しにくいのだろうか。それとも、チャンスは平等であったり、むしろ豊かな経験ができるのだろうか。

第 16 回出生動向基本調査によれば、2018 年 7 月～ 2021 年 6 月の初婚のうち、恋愛結婚 74.6% とインターネット経由 15.2% の合計が 89.8% だったのにたいし、見合い結婚 9.9%、その他・不詳 0.3% であった（妻が 50 歳未満で結婚し、調査時に妻 55 歳未満の夫婦）。インターネット経由は見合い結婚とはいえないため、恋愛結婚に含めるなら、ほぼ 9 割が恋愛結婚だったといえる。

そのため、おおくの人にとって恋愛が結婚の前提条件となり、恋愛経験が家族形成のファーストステップとなっていた。そこで、ここでは以下のリサーチクエスチョンを検討する。

リサーチクエスチョン. 家族形成まえに貧困を経験したり、現在貧困を経験している人は、そうでない人とくらべて、恋愛経験に不平等があり違いがあるのか。

定義. 貧困とは、ある時点のある社会のなかで、もっとも経済状態が悪いグループにいることをさす。とくに、等価世帯所得が貧困線未満のとき、相対的貧困状態といい、そうした人びとを貧困層とよぶ。貧困線以上だが中央値未満のとき準貧困層とよび、中央値以上のとき中央値以上層とよぶ（準貧困層については小林 2021 参照）。

これが未解明のままでは、家族形成のファーストステップである恋愛経験に不平等があっても、見のがされかねない。

1.2　仮説

恋愛経験の規定要因について、先行研究でどこまで解明されているか。Kobayashi（2017）は、世代間の比較をした結果、男性は若い世代ほど草食化し恋愛経験がへったが、女性はむしろふえたことをしめした。茂木・石田（2019）は交際スタートの条件を分析した結果、男女ともに教育や職業（初職）が効果をもつことはなく、結婚意欲のみが交際を促進した。内藤（2019）は、充実した人生に恋愛が必要とみなす人を対象に分析した結果、個人収入が多いほど恋人との交際経験が増加することを明らかにした。

内藤（2019）の結果は、貧困層ほど恋愛経験が低下することを示唆する。ただし、貧困経験の効果は未解明のままである。そこで、ここでは以下の 2 つの仮説にアタックする。

仮説 1. 家族形成まえの過去の貧困経験や現在の貧困経験は、ライフチャンスをせばめるため、恋愛経験を低下させるだろう。

仮説 2. 男女のあいだで恋愛のメカニズムが異なるため、貧困経験から恋愛経験への効果は、男女で異なるだろう。

なお、恋愛についての計量分析は、アメリカ社会について Kinsey et al.（1948）にはじまり、Laumann et al.（1994）などで展開された。日本社会については、内閣府（2011）、日本性教育協会編（2013）、小林・大﨑（2019）などがある。質的分析としては谷本（2008）がある。

2　方法

2.1　データ

データとして、家族に関する振り返り調査を用いる。「大規模回顧調査による家族形成期のパネルデータ分析」プロジェクトにより、2022 年 2 ～ 3 月に郵送配布回収として実施された（研究代表者は保田時男）。母集団は全国の 35 ～ 49 歳個人（2021 年末日時点年齢､1972 ～ 86 年生まれ）で、地域・都市規模による区分で層化二段無作為抽出された（抽出名簿は選挙人名簿および住民基本台帳）。計画標本サイズは 7,620 で、有効回収票数は 3,327 だった（回収率 43.7％）。

すべての変数が有効だった標本 N=2,271（うち男性 1,061、女性 1,210）を、分析対象とする。仮説にもとづき男女別で分析する。

標本の内訳はどうか。属性のうち、平均年齢は男性 42.5 歳、女性 42.6 歳、婚姻状態別では男性で現在結婚 72.5%、離死別 5.9%、未婚 21.6%、女性で 72.6%、10.2%、17.2%、平均世帯人数は 3.14 人であった。社会経済的地位については、平均教育年数は男性 14.2 年、女性 13.7 年、従業上の地位別では男性で正規雇用 81.8%、非正規雇用 5.8%、自営 9.2%、無職 3.1%、女性で 42.1%、35.4%、6.5%、16.0%、平均個人収入は男性 532.1 万円、女性 261.0 万円（中央値は男性 400 万円、女性 225 万円）、平均等価世帯収入は男性 412.6 万円、女性 376.2 万円（中央値は男性 400 万円、女性 357.8 万円）だった。収入は 7 カテゴリで質問し、各カテゴリの中央値を用いた。ただし、親の収入が未測定のため、世帯に夫婦とその子以外を含めていない。

2.2　変数

従属変数である恋愛経験を、どう測定するか。ここでは以下のように 6 項目について、表（バテリー）で人数を質問した。

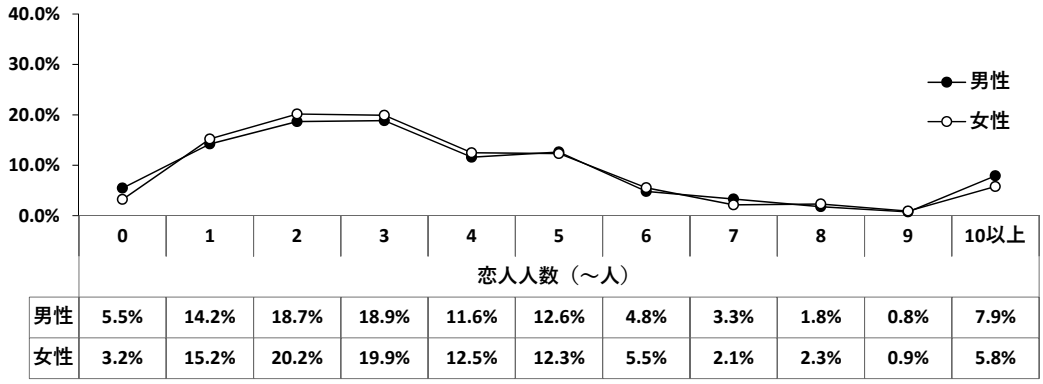
質問. 中学校卒業から最初の結婚まで（未婚なら現在まで）の間で、次のような恋愛の相手は、何人くらいいましたか（結婚相手を含む）。

（項目）「あなたから」恋愛感情を告白した人、「あなたに」恋愛感情を告白した人、「デート」をした人、「キス」をした人、「セックス」をした人、「恋人」として交際した人

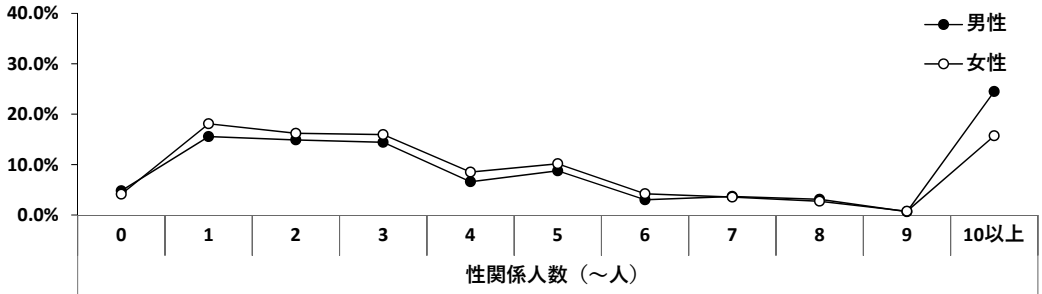
（選択肢）なし、1 人、2 人、3 人、4 人、5 人、6 人、7 人、8 人、9 人、10 人以上

このうち、ここでは基本的な恋愛経験として「「恋人」として交際した人」を、またもっとも深い恋愛経験として「「セックス」をした人」をとりあげ、恋人人数、性関係人数とよぶ。なお、このようにここでは対象が異性間の恋愛に限定されていない。

集計ではなしは 0 人、10 人以上は 10 人とした。図 1 が分布を報告する。性関係人数がランダム



恋人人数（～人）	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10以上
男性	5.5%	14.2%	18.7%	18.9%	11.6%	12.6%	4.8%	3.3%	1.8%	0.8%	7.9%
女性	3.2%	15.2%	20.2%	19.9%	12.5%	12.3%	5.5%	2.1%	2.3%	0.9%	5.8%



性関係人数（～人）	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10以上
男性	4.8%	15.6%	14.9%	14.4%	6.6%	8.8%	3.0%	3.7%	3.1%	0.7%	24.5%
女性	4.1%	18.1%	16.2%	16.0%	8.5%	10.2%	4.2%	3.6%	2.7%	0.7%	15.7%

図１　男女別、恋人人数、性関係人数の分布

注）N ＝男性 1,061、女性 1,210。

サンプリングで測定されたのは、日本で初である。10 人以上を除くと、どの分布も一山だった。カイ二乗検定の結果、恋人人数の分布に男女差はなく、性関係人数では 0.1% 水準で差があった。ジニ係数を求めたところ、恋人人数では男性 0.384、女性 0.363、性関係人数では男性 0.408、女性 0.412 であった。

表 1 が、記述統計を報告する。平均恋人人数は男性 3.70 人、女性 3.60 人、平均性関係人数は男性 4.79 人、女性 4.19 人であった。他に、告白した、告白された、デートした、キスした人数の平均は、男性で 2.96 人、3.02 人、5.40 人、5.07 人、女性で 2.41 人、2.90 人、3.37 人、3.53 人だった。これらの人数は、小林（2022）とおおきな矛盾がなかった。

独立変数のうち、家族形成まえの貧困経験は「15 歳から現在までの間について、当時のあなたは、経済的にゆとりがあったと思いますか。（親の家計に入っていたときは、実家の状況でお答えください）」と聞いた。選択肢は 5 段階で 5 ゆとりがあった、4 どちらかといえばゆとりがあった、3 ふつう、2 どちらかといえば苦しかった、1 苦しかったであった。

このうち 15 歳時のものを家族形成まえの貧困経験を表すものとみなし、「15 歳時経済的ゆとり」とよぶ。平均は男性 3.35、女性 3.42 だった。

とくに 1 苦しかった場合を 15 歳時貧困経験と、2 どちらかといえば苦しかったを 15 歳時準貧困

表 1　従属変数、独立変数の記述統計

		従属変数		独立変数					
				15 歳時の貧困経験			現在の貧困経験		
		恋人人数	性関係人数	苦しかった	どちらかといえば苦しかった	それ以外	貧困層	準貧困層	中央値以上層
男性	平均・比率	3.70	4.79	7.3%	14.6%	78.1%	8.1%	32.8%	59.1%
	標準偏差	2.64	3.51						
女性	平均・比率	3.60	4.19	7.4%	14.0%	78.5%	16.6%	35.8%	47.6%
	標準偏差	2.44	3.15						

注）N ＝男性 1,061、女性 1,210。

経験とみなす。表 1 より、男性のうち 15 歳時貧困経験者（苦しかった）7.3%、準貧困経験者（どちらかといえば苦しかった）14.6%、それ以外 78.1% であり、女性のうちそれぞれ 7.4%、14.0%、78.5% であった。ほんらいなら、収入のような客観的指標を用いるほうが望ましいが、データの制約からこのように主観的指標を用いる。

現在の貧困経験は、等価世帯収入で測定する。貧困線が 187.5 万円であり、男性のうち貧困率は 8.1%、準貧困率は 32.8%、中央値以上層が 59.1% いた。女性のうち、それぞれ 16.6%、35.8%、47.6% であった。

なお、いっけんすると 15 歳時貧困経験は現在の貧困経験に関連しそうに思える。そこで、15 歳時経済的ゆとりの 3 カテゴリ（およびオリジナルの 5 カテゴリ）と、現在の貧困経験の 3 カテゴリ（貧困層、準貧困層、中央値以上層）でカイ二乗検定をおこなった。その結果、すべて有意な関連はなかった。したがって、たとえ 15 歳時に貧しくても、現在貧しいわけではなかった。

3　分析結果

3.1　平均の比較

貧困経験は、恋愛経験にどう影響するのか。まず、15 歳時の貧困経験として 15 歳時経済的ゆとりの 3 カテゴリを独立変数にして、恋人人数と性関係人数を従属変数とした分散分析を実施した。図 2 上が結果を報告する。これによれば、男性ではどちらの人数にも有意な効果をもたなかった。女性では、しかし、どちらの人数にも有意な効果をもった。ただし、仮説 1 では 15 歳時に豊かな人ほど恋愛経験がふえると予想したが、女性では恋人人数、性関係人数どちらも有意にへった。つまり、女性では貧困経験が恋愛経験を抑制するのではなく、むしろ促進した。

つぎに、現在の貧困経験はどうか。現在の貧困層、準貧困層、中央値以上層の 3 カテゴリを独立変数とした。図 2 下によれば、男性ではどちらの人数にも有意な効果をもった。具体的には、仮説

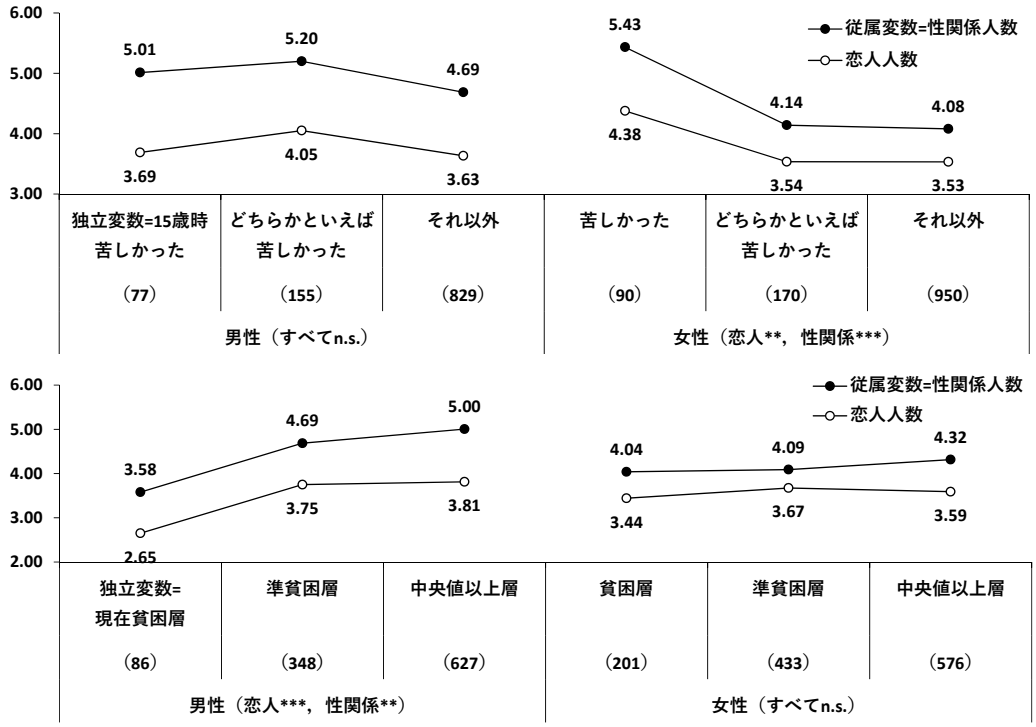


図２　男女別、貧困経験を独立変数とした、恋愛人数の平均の比較

注）N ＝男性 1,061、女性 1,210。分散分析で *5%、**1%、***0.1% 水準で有意、n.s. それ以外。

1 で予想したとおり、現在貧困層にいる人ほど、恋人人数と性関係人数のどちらも有意にへった。女性では、ただし、有意な効果がなかった。

なお、（結果の数値は省略するが）恋人、性関係の経験があるか（つまり 0 人か 1 人以上か）を従属変数としたところ、同じような傾向をもった。ただし、カイ二乗検定の結果、15 歳時経済的ゆとりの有意な効果はなくなり、現在の貧困経験がすべて有意な効果をもった（男女とも、現在貧困層であるほど有意に恋人、性関係どちらも経験がなかった）。

また、（結果の数値は省略するが）従属変数を告白した人数、告白された人数、デートした人数、キスした人数としても、15 歳時と現在の貧困経験がおおむね同様の効果をもつことが確認された。

3.2　回帰分析

年齢と教育年数で統制したうえで、恋人人数と性関係人数を従属変数とした回帰分析を実施した。貧困経験の効果を明確にするため、独立変数として 15 歳時苦しいダミーと現在貧困層ダミーを用いた。表 2 が結果を報告する。

この結果は、分散分析結果を裏付けた。15 歳時の貧困経験（15 歳時苦しいダミー）は、男性で有意な効果をもたず、女性では有意な正の効果をもった。現在の貧困経験（現在貧困層ダミー）はぎゃくに、男性のみで有意な、そして負の効果をもった。

表 2　男女別、恋愛人数を従属変数とした回帰分析結果

	男性		女性	
	従属変数			
	恋人人数	性関係人数	恋人人数	性関係人数
年齢	0.010	0.028	− 0.110 ***	− 0.078 **
教育年数	− 0.104 ***	− 0.103 ***	− 0.089 **	− 0.144 ***
15 歳時苦しいダミー	− 0.012	− 0.006	0.082 **	0.097 ***
現在貧困層ダミー	− 0.125 ***	− 0.110 ***	− 0.043	− 0.047
決定係数	0.025	0.022	0.028	0.037

注）N ＝男性 1,061、女性 1,210。値は非標準化係数。*5%、**1%、***0.1% 水準で有意。

なお、（結果の数値は省略するが）男女を合併した標本で各独立変数と性別の交互作用を調べたところ、すべて（分散分析結果と一致する形で）有意な効果をもった。

また、15 歳時苦しいダミーを 15 歳時経済的ゆとりの 5 値へ変えても、現在貧困層ダミーを等価世帯収入に変えても、おおきな変化はなかった。ただし、女性において、恋人人数、性関係人数への 15 歳時経済的ゆとりの効果がなくなり、現在の等価世帯収入が有意な正の効果をもった。

従属変数を告白した人数、告白された人数、デートした人数、キスした人数へとした場合、おおむね分散分析の結果と矛盾しなかった。

4　考察

4.1　仮説の検証結果、リサーチクエスチョンへの回答

以上から、たしかに仮説 1 のとおり男性において現在の貧困経験が恋愛経験を低下させた。しかし、女性ではむしろ、過去の 15 歳時の貧困経験が恋愛経験を増加させた。つまり、男性には（現在の）貧困が恋愛の阻害要因となり、女性には（過去の）貧困がぎゃくに促進要因となった。図 3 が分析結果を要約する。

ここから、以下のとおり仮説の検証結果をえる。その結果、リサーチクエスチョンにつぎのように回答できる。

仮説 1、2 の検証結果. 仮説 1 は一部支持され、仮説 2 は支持された。

リサーチクエスチョンへの回答. 家族形成まえに貧困を経験したり、現在貧困を経験している人は、そうでない人とくらべて、恋愛経験に違いがあった。ただし、男女でメカニズムが異なった。男性では、現在の貧困経験が、予想どおり恋愛経験をへらした。女性では、家族形成まえの 15 歳時の貧困経験が、予想と異なり恋愛経験をむしろふやした。

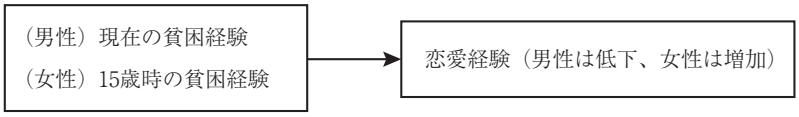


図3　分析結果の要約

注）回帰分析結果より。矢印は因果関係を表す。

したがって、恋愛経験には貧困経験による不平等がたしかにあった。ただし、貧困から恋愛への規定メカニズムは、単純ではない。貧困はいわば、恋愛経験にとって、ときに毒にも、ときに薬にもなるといえる。

では、なぜ女性で15歳時貧困経験が恋愛経験を促進するのか。（結果の数値は省略するが）女性を中学・高校卒と短大・四大・大学院卒グループにわけ、分散分析と回帰分析を実施した。すると、どちらの分析でも中学・高校卒グループのみで、15歳時貧困経験が有意に恋人人数、性関係人数を促進した。いっぽう、短大・四大・大学院卒グループでは効果がなかった。そのため、教育達成グループによって、教育という人的資本と、恋愛という社会関係資本と、どちらに優先的に投資し蓄積するのかが異なる可能性がある。

なお、恋愛経験の規定要因として15歳時貧困経験と現在の貧困経験を用いた。このうち、現在の貧困経験は、これまでの恋愛経験より時間的に先行するとはかぎらない。現在の貧困状況が、15歳以降同じという保証もない。したがって、現在の貧困経験は原因というより、人びとをいくつかのタイプに分けるもの、とこの論文ではとらえたことになる。

4.2　課題

第一、この論文ではデータの制約から、分析対象が35～49歳に限定された。この人口については厚い分析ができるが、他の年代では異なるメカニズムとなる可能性も排除できない。

第二、恋愛経験を恋人人数や性関係人数で測定し、人数が多いほど恋愛のチャンスが拡がったものと仮定した。ただし、これは自明ではない。人によっては人数の多さより「少数でも、じっくり深い恋愛をする」ことを優先するかもしれない。

そもそも、恋愛、結婚、出産といった家族形成は、個人の自由にゆだねられるべきものである。そのとき、そうしたチャンスが平等であることを、社会がどこまで保証すべきかは、今後の課題としたい（不平等のパターン分けについては小林2017がある）。

経済的に豊かでも貧しくても、平等に豊かな恋愛をし、幸せな家族形成ができる――そのための条件の解明が、引きつづき期待されよう。

［謝辞］

本研究は JSPS 科研費 19H00615「大規模回顧調査による家族形成期のパネルデータ分析」（代表：保田時男）の助成を受けて実施した「家族に関する振り返り調査」の ver.2.4 データを利用しています。分析にあたり、伊藤慈晃氏（成蹊大学助手）に協力いただきました。

［文献］

小林盾、2017、『ライフスタイルの社会学：データからみる日本社会の多様な格差』東京大学出版会。

小林盾、2021、「総括　子供の貧困の実情と求められる支援：令和 2 年度子供の生活状況調査からのメッセージ」『令和 3 年子供の生活状況調査の分析報告書』146-152。

小林盾、2022、「恋愛人口の頻度と関連要因」小島宏・和田光平編『セクシュアリティの人口学』原書房。

小林盾・大﨑裕子、2019、「恋愛から結婚：恋愛は結婚へのパスポートか」小林盾・川端健嗣編『変貌する恋愛と結婚：データで読む平成』新曜社。

谷本奈穂、2008、『恋愛の社会学：「遊び」とロマンティック・ラブの変容』青弓社。

内閣府、2011、『結婚・家族形成に関する調査報告書』。

内藤準、2019、「家族と自由：交際・結婚・出産育児の社会経済的不平等」小林盾・川端健嗣編『変貌する恋愛と結婚：データで読む平成』新曜社。

日本性教育協会編、2013、『「若者の性」白書：第 7 回青少年の性行動全国調査報告』小学館。

茂木暁・石田浩、2019、「結婚への道のり：出会いから交際そして結婚へ」佐藤博樹・石田浩編『出会いと結婚』勁草書房。

Kinsey, A. C., Pomeroy, W. B., and Martin, C. E., 1948, ***Sexual Behavior in the Human Male***. Philadelphia: W. B. Saunders and Company.

Kobayashi, J. 2017, “Have Japanese People Become Asexual?: Love in Japan,” ***International Journal of Japanese Sociology*** 26: 13-22.

Laumann, E. O., J. H. Gagnon, R. T. Michael, and S. Michaels, 1994, ***The Social Organization of Sexuality: Sexual Practices in the United States***. Chicago: University of Chicago Press.